手節

給テ、晝間ノ程玉臂ヲ枕トシテ、トバカリ眞眠給ケルニ、夢中ニ日光懷中ニ入ト覺エテヨリ、懷胎シ給フ、

〔伊呂波字類抄太人體〕髆脘タフサ

〔雅言集覽二十二太〕たぶさ、手拳　俗ニ手ブシトイフ、

〔日本書紀十三允恭〕元年十二月、季冬之節、風亦烈寒、大中姫所捧鋺水溢而腕凝タフサ不堪、以將死、

〔萬葉集一雜歌〕幸于伊勢國時留京柿本朝臣人麿作歌○中略

釧著、手節乃崎二、今毛可母、大宮人之、玉藻苅良武、

〔後撰和歌集一春〕彌生ばかりの花のさかりみちまかりけるに　僧正遍昭

おりつればたぶさにけがるたてながらみよの佛に花たてまつる

〔倭名類聚抄三手足〕拳　唐韻云、拳權反、和名古不之、屈手也、

〔箋注倭名類聚抄二手足〕山田本作渠員反、按音權與廣韻合、渠員與玉篇合、字異音同、然此引唐韻作音權爲是、新撰字鏡同訓、○中略按玉篇、拳屈手也、孫氏蓋依之、說文、手拳也、拳手也、段玉裁曰、舒之爲手、卷之爲拳、其實一也、故手拳互訓、

〔類聚名義抄三手〕拳音權、コフシ、　搏コフシ

〔增補下學集上二支體〕拳コブシ

〔身體和名集仁〕ニギリコブシ　拳

〔倭訓栞中編古八〕こぶし　拳をよめり、小節の義成べし、新撰字鏡に捧ともみゆ、的矢に一こぶしと云ふ事、太平記に見えたり、

〔源平盛衰記二十三〕忠文祝神附追討使門出事

爰ニ忠文大惡心ヲ起シテ、面目ナク內裏ヲ罷出ケルガ、天モ響キ地モ崩ル、計ノ、大音聲ヲ放云